

植民地期朝鮮の夜学教師に関する一考察

—1930-40年代の夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—

李 正連*

はじめに

植民地期朝鮮における三・一運動(1919年)以後の教育熱の高まりは多くの研究で指摘されてきたことである¹。初等教育機関の公立普通学校に入学する際も「入学試験」が課されるようになり、それは1930～40年代まで続くほど、入学難は慢性的な問題であった。しかし、このような入学難に対する朝鮮総督府の対応は微温的であり、「1面1校制」が完成されたと主張した1930年代後半にも朝鮮民衆の7割近くは非識字者であった²。このような状況は、朝鮮民衆による私立学校設立運動や夜学運動を引き起こす原因となった。夜学に関していえば、植民地期に設立・運営された夜学だけでも7万余箇所に上るほど³、夜学は学齢児童のみならず、成人非識字者の識字教育をも担った教育施設であった。

夜学に関する研究は1970-80年代から行われてきたが、その大半は夜学を民族教育の場として描いていた⁴。しかし、1990年代末頃から「抑圧—抵抗」という二項対立的な研究視点を乗り越えようとする研究⁵や、文献資料中心の考察を補うためオーラルヒストリー調査を加えた研究⁶が登場するなど、植民地期朝鮮の夜学に関する研究の幅が少しずつ広がりを見せている。

これまでの研究は、1920-30年代の夜学に集中しているが、それは、三・一運動以後夜学が急増し、また当時その夜学に関する情報を多く報じた『東亜日報』や『毎日申報』、『朝鮮日報』等の新聞記事が研究資料として活用できたからである。ところが、当時の新聞記事から得られる情報は夜学に関する概略的なものが大半で、従来の研究ではそれらの新聞や雑誌等を使った量的分析を行うものが多く、夜学の全貌を明らかにするには十分とはいえない。例えば、植民地期朝鮮の夜学教師に注目した研究は極めて少ないが、当時の新聞記事に夜学教師に関する情報も少なく、記事の中に教師に関する内容がある場合でも教師の氏名や身分、人数程度の情報しか載っていない場合が多い。それゆえ、夜学教師に関する研究に踏み込むことはそれほど

簡単ではない。その中、金敏男とチョ・ジョンボンが、永川地域や漆谷地域等の慶尚北道地域における夜学経験者(当時の教師及び生徒やその子孫及び地域住民等)への聞き取り調査を行い、植民地期夜学教師の実態に迫ろうと試みている。しかし、聞き取り調査対象者の選定において当時の刑事事件簿を参照しており、その大半が檄文の配布や社会主義の組織結成等の治安維持法違反で検挙・逮捕された夜学教師とその家族や周辺人物等である。聞き取り調査によって新聞や雑誌では明らかにできなかった植民地期夜学の実態がうかがえるものの、上記のような証言者の選定方法によって、それらの証言は民族的・抗日的な視点から調査、分析されていると言わざるを得ない⁷。当時の夜学は、全国的に広まっており、その運営実態や特質は必ずしも一様ではない。

そこで、本研究では、筆者が2013年4月から約4年半にわたって行ってきた植民地期夜学の経験者(教師と生徒)へのオーラルヒストリー調査結果をもとに、植民地期朝鮮における夜学教師の教育活動とその意義をより多面的に考察したい。

1. 夜学の種類と設立主体

1) 私設学術講習会(夜学)

夜学は設立主体によって、大きく私設学術講習会と官立学術講習会に分けることができる。盧榮澤は、「私設学術講習会(以下「講習会」という)は概ね夜間に講習が実施されたため、一般的に『夜学』といわれた」と言いながら、「夜学講習会を『夜学』と通称したため、一般的には夜学を『講習会』と別の形態のように使っているが、実は『夜学』も『講習会』の一形態に属するものである」と説明している⁸。実際、植民地期当時の新聞や雑誌を見ると、同じところを夜学会と講習所両方の名称で呼んだ場合もある。例えば、本研究の研究対象でもある忠清南道論山郡連山面白石里の「白石労働夜学会」はその出身者たちによって「夜学会」と呼ばれ、記録も残っているが、当時の新聞では同夜学

*東京大学大学院教育学研究科准教授

会を「講習所」と報じている⁹。金炯睦も「夜学は正規の教育機関でない私設講習会・講習所で行われた様々な類型の教育を意味する」¹⁰と述べている。つまり、夜学と私設学術講習会・講習所はほぼ同義語としてとらえられるものであるといえよう。本稿では「夜学」を夜間に行われたものだけではなく、昼間に行われた私設講習所や講習会等も含む、広い意味での夜学としてとらえて使用する。

金炯睦は、夜学を民族夜学と植民夜学に区分し、民族夜学はまた啓蒙夜学と民衆夜学に大きく分けられると述べている。しかし、啓蒙夜学と民衆夜学は、一般に夜学設立・運営主体の区分と教育内容も意識化のための読書会を除いて大きな差は把握しがたいため、その区分は明確ではないだけではなく、曖昧性を持つと主張する¹¹。盧榮澤は、夜学を大きく次の三つに分けている。第一に、エリート知識人が主導した「啓蒙夜学」として、代表的なものに1920-30年代に展開されたハンゲル普及と農村啓蒙のための新聞社主導の「ブナロード運動」や教会中心の「夏期児童聖經学校」があり、第二に、1919年以後労働者や農民等の民衆が主導した「労働夜学」、第三に、官主導で主流文化を伝えた「官製夜学」があるという¹²。金と盧による区分は、その表現は少し違うものの、以上をまとめれば、夜学はその設立主体や目的によって大きく私設学術講習会と官立学術講習会に分けることができ、そのうち、私設学術講習会（夜学）はまた啓蒙夜学と民衆夜学に分けることができるといえよう。

2) 官立学術講習会

官立学術講習会は、地方行政当局によって開設された講習会として、いわゆる「官製夜学」を指す。例えば、慶尚北道星州郡当局では、「約3ヶ月間の農閑期を利用して星州人口の8割を占めるといわれる文盲を退治することを目的とし、郡内の各面職員及び各学校教員を総動員してまず更生農家63部落に32箇所の夜学会を設置することとなり、来る11月1日からは一斉に開学する」¹³と新聞に報じられている。

官製夜学は普通学校に開設される場合が多いが、それは、1919年の三・一運動以後、抗日運動の再発防止とともに、朝鮮民衆の教育熱を吸収するために、朝鮮総督府が「学校を中心とする社会教育」施策を強化するようになったこととも関連がある。同施策の内容を見ると、小学校及び普通学校に対し、社会教育として「校地校舎及設備の開放利用」や「簡易図書館及文庫等の開設」のほか、「講話会、講演会、講習会及各種の会合」を実

施するようにしている。講習会としては国語講習会や不就学児童講習会、婦人講習会等が行われるようになっていく¹⁴。このように講習会や夜学会が普通学校で行われるようになった背景には、三・一運動以後急増する普通学校への就学希望率とともに、朝鮮民衆による学校設立への強い要求があった。こうした朝鮮民衆の教育熱を、朝鮮総督府は既存の学校を利用する社会教育施策に取り組むことで解決しようとした。その代表的な例として、慶尚北道の慶州公立普通学校に関する次の記録があげられる。すなわち、「慶州公立普通学校に於ては大正十年四月入学せしむべき生徒六十五人を募集せしに志願者は二百五十三人に達し大多数は入学の目的を達すること能はす其の中約四十人は慶州面所在の私立啓南学校に入学せしも尚多数の入学不能者あるを以て何等かの方法を講し之か就学難を緩和し救済するは地方教化上必要の事項たるを認め大正十年四月当該学校の附帯事業として『慶州国語講習会』を設置し講習期間を一個年として教科目は普通学校に準し慶州普通学校の備品を使用して授業を開始して」¹⁵（傍点、引用者）いた。また、咸鏡南道の高原公立普通学校では1921年7月4日まで40日間毎日3時間ずつ「不就学児童講習会」を開き、「修身、国語（日本語一引用者）、朝鮮語及漢文、算術」（普通学校第1学年第1学期教育課程を基準とする）を教えており¹⁶、咸鏡北道の清津公立普通学校でも「清津の補習夜学会」を1921年3月に設置し、「（普通学校入学一引用者）年齢超過児童を収容し普通学校使用教科書に拠り主として国語（日本語一引用者）の学習をなさしめ尚ほ修身、算術、朝鮮語漢文、理科、唱歌、体操」を教えていた¹⁷。

1930年代には農村振興運動のために各地方に組織された農村振興会によっても大々的に夜学が開設された。例えば、京畿道抱川郡西面魚龍里の間村農村振興会は同会創設直後から「文盲打破の一策」として毎年農閑期を利用して無産の男女児童に対して夜学会を行っており¹⁸、江華郡でも各処に夜学会を開設して一般民衆にハンゲルを教えていた¹⁹。

そして、日中戦争勃発後の皇国臣民化政策によって、「国語」の普及は学校以外のところでも要求され、官公署職員をはじめ、学生・生徒・児童はもちろんのこと、会社・工場・鉱山、「青年団婦人会、教会其他の集合」などを対象とし、「一日一語習得運動」、「国語講習会」、「国語」常用者に対する表彰など、あらゆる方策を通じて「国語」普及が試みられた²⁰。実際、1941年、京城府当局では「真の内鮮一体はまず国語解得によって…」という総力連盟の指導スローガンに歩調を合わせ

て「百万府民の国語解得」運動を起こし、「従来初等学校で若干講習会等を開いてきたが、今回府の計画によって、府内百三十一町に各町を単位に各町連盟が主催して町民国語講習会を一斉に開催しようとするのである。講習期間は3ヶ月間とし、府内国民学校の教室を借りて使うことにし、講師はなるべく国民学校の教員に頼み、一日2時間程度日常生活に必要な簡易なる国語から教習させて、この非常時局に置かれている総動員体制に府民一人も欠かさないようにするためである。準備さえ終われば、7月中旬からでも一斉に講習を開始する予定である」²¹と報じられている。京畿道烏山面と黄海道延白郡及び延安邑等でも各部落で国語講習会を開き、「国語全解に拍車」をかけるなど²²、官立学術講習会が増えていった。

2. 夜学教師の諸相

1) 夜学教師の類型

植民地期朝鮮の夜学教師は、夜学の設立・運営主体である場合も多い。1920年代の『東亜日報』の記事を分析した石川の研究によれば、当時夜学は地方有志（有力者）によって設立されたものが最も多く、次に青年・婦人団体、宗教界、労働者・農民団体、教育関係者、警察および地方官吏の順であった²³。

まず、地方有志の性格やその範囲は明確ではない。ところが、有志個人が設立する場合もあったが、その大半は集団的で、共同的なものであったことなどから、少なくとも彼等は各地方で発言権をもち、または推進力をもつ者であったと思われる。また、当時夜学が急増した背景には、三・一運動後に強調された実力養成運動の機運とともに、民衆の教育熱とそれを吸収する教育機関の不足という問題があった。その中で地方有志によって設立された夜学の大半は、労働者や農民などの無産階級を主な対象として無償で行われる場合も多く、また設立者自身が教える場合が多かった²⁴。夜学の教師には正規の教員免許所持者採用という規定はなく、実際教員免許をもって夜学教師になる場合は少なかった。大半の夜学では読み書き計算という識字教育が中心となっており、初等教育以上の教育を受けている人であれば、夜学で教えることができた。以上より、地方有志は財政調達能力があり、近代学校教育の経験者であったと思われる。

第二に、夜学を設立・運営した主体として、青年会や婦人会、宗教系団体などの諸団体が挙げられる。当時の新聞には、これらの諸団体が運営する夜学についての記事が数多く紹介されているものの、教師につい

ての情報は氏名以外のものは得られない場合が大半である。それゆえ、教師の年齢や学歴、学識レベル、職業等の詳しいことは把握しがたい。

第三に、現役生徒や学生が夜学教師を担った場合も少なくない。「生徒が田舎に帰ったら、普通学校5・6年生が、国文（ハングル一引用者）のわからない人々に教えてあげるように周旋した方がよいと思う」²⁵という意見や、「（正規学校の生徒が一引用者）休みの時に（実家に一引用者）帰ってすべきことはいろいろあると思われるが、私が言いたいのは、学校にいけない児童に朝鮮文字を教えてほしい」²⁶という当時の知識人の提言等にみられるように、普通学校に通う幼い生徒が教える時もあった。実際、京畿道振威郡の事例をみれば、次の通りである。

振威郡西炭面水月岩里の康昊燮、崔仁泰両君は現在烏山公立普通学校6年級に在学中であるが、去る夏期休暇を利用して同里無産児童を対象にハングル講習とその他算術、習字等を教授して30余名の修業者を出しており、それを記念するために学芸会まで開催して大成功裏に終え、再び純白な農村の文盲を根本的に退治しようとする固い決心と熱い誠意で努力してきたが、来る11月15日から農民夜学を開講することにし、その実現を見ることができたそうで、一般無産児童と郡内有志たちの称賛が高いそうである。普通学校の児童として一方では学びながら、一方では教えることは、学校が足りず、勉強する月謝金がなくて子どもが大変な朝鮮でなければ見難い現象といえよう²⁷。

黄海道延白郡柳谷面永成里でも私立彰東学校に通う二人の少年が無産児童のために夜学を開き、教えていた²⁸。このような現役生徒による夜学活動には、1920年代後半から始まった朝鮮農民社や東亜日報社等によるハングル普及運動をはじめとする農村啓蒙運動の影響が大きかった。

第四に、面書記や区長、巡査などの地方官吏が夜学を設置し、直接教鞭をとるところもあった。例えば、平安北道寧邊郡龍山面新興市は、教育機関がなく、さらに同面の球場公立普通学校まで約12キロも離れていて子どもたちが通学することも難しいことから、警察官駐在所の巡査部長及び巡査2名が「1921年11月から当地に夜学会を開設し、生徒を募集して勤務の余暇に毎晩二時間ずつ普通校程度の学科を以来教授」²⁹しており、全羅北道沃溝郡大野面では、面長と面書記が

同面事務所内に夜学会を設立し、講師を地境駅の駅長と面書記が担当していた³⁰。これらの地方官吏による夜学、とりわけ1930年代は朝鮮総督府が進めた、いわゆる「農村振興運動」の一環として全国各地の農村振興会による夜学設置が進められたこともあり³¹、地方官吏や資産家が夜学設立者の場合はすべて「官製夜学」と見做しがちであるが、そのような単純な適用には注意を払う必要があるという声もある。すなわち、金炯睦は「自強運動論者・実力養成論者のうち、夜学運動を主導した人物の大半は前・現職官吏や資産家だった」³²と指摘する。実際、富川郡桂南面梧柳洞区長の李聖煥氏が「同里の貧しい人々に穀物を施し、自家に講習会を設立して無産児童を教養するなどの篤行の事績が多くてその付近で称賛の声が多」かったという記事³³や、所有家屋を「文盲児童退治」のための夜学堂として寄贈した扶餘郡林川面飛亭里の有志と一緒に夜学を設立した南相宰区長が、区長の報酬としてもらう麦粗を夜学経費として充てていたという記事³⁴、農民夜学堂を運営した平安南道德川郡農民社³⁵の理事が区長も兼任していたという記事³⁶などからは、これらの夜学に地方官吏の区長が関わっているものの、官製夜学とは断言しがたい面がある。

第五に、上述したように「学校を中心とする社会教育」施策とともに1930年代の農村振興運動によって、官製夜学が公立普通学校に設置されることも多く、その場合学校教員が夜学教師を主に担当していた³⁷。そして日中戦争勃発後は皇国臣民化政策に伴い、小学校や国民学校で不就学者や「国語」が理解できない人たち向けの「国語講習会」が開催された。一方、私立学校の教員も私立学校内に夜学部を設立して教えたり³⁸、教師がいなくて廃校危機に置かれた労働夜学校に出向いて教えたり、さらには自ら夜学校を新設したりするケースもあった³⁹。

2) 夜学に対する統制と夜学教師講習会

朝鮮総督府は、1913年1月「私設学術講習会二関スル件」を公布し、主として朝鮮民衆が運営する各種の講習所や講習会、夜学等の私設教育施設や活動を統制していた。「道知事の認可」が必要だった夜学に比べて、まだ書堂に対しては「府尹、郡守又は島司二届出」を提出する届出制だったので、当局の取締を避けるために夜学を「改良書堂」に変え、設立することもあった。それに対し、朝鮮総督府は1929年「書堂規則」を改正して書堂設立基準を「届出制」から「認可制」にする書堂統制策として対応した。それによって夜学の設

立環境はより厳しくなり、1930年代には入ってからは社会主義思想の取締を口実に夜学に対する不穏思想統制が強化され、運営そのものも難しくなっていた⁴⁰。

そして1932年から始まったいわゆる「農村振興運動」に伴い、官製夜学を増やしつつも、一方では「私設学術講習会(夜学)」への取締を厳格化したのである。例えば、1932年11月28日に開催された江原道伊川郡安峽面区長会議では「農村振興自力更生の完璧を期する」ための協議事項の一つとして「私設学術講習会取締の件」⁴¹を入れている。さらに、1934年頃からは「夜学教師講習会」や「書堂教師講習会」を拡大させ⁴²、書堂と夜学に対する指導監督を強化した⁴³。とくに、京畿道では農村啓蒙のために農村振興会に夜学を開催するようにしたが、その夜学を担当する教師に対して教授方法と教授上注意をさせる必要があるとし、1934年5月から7月にかけて道嘱託の崔秉協が講師として各郡を巡回しながら夜学教師講習会を開催していた⁴⁴。

1940年代に入ってから私設教育施設に対する統制は続くが、1942年から本格化した「国語普及運動」⁴⁵によって学校だけではなく、夜学においても朝鮮語教育は厳しく統制された。

3. 夜学教師の活動とその特徴－夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに－

1) インタビュー調査対象及び調査方法

①インタビュー調査対象

2013年4月29日に韓国に在住する植民地期朝鮮の夜学経験者へのインタビュー調査を始め、2017年9月9日まで計83名に対してインタビューを行ってきた。ただ、インタビュー対象者を探す際に、「正規の学校でないところ、例えば、夜学や講習所等のようなところで学んだもしくは教えた経験がある人」と少し幅を持たせて探していたこともあり、実際インタビュー調査を行ったところ、私立学校及び簡易学校の出身者、夜学無経験者、戦後の夜学経験者、高齢や健康上の問題等で十分なインタビューができなかった者が17名で、彼・彼女らを除くと、有意義なインタビューができた夜学経験者は66名(男性36名、女性30名)である。そのうち、夜学教師の経験のある者は4名(男性3名、女性1名)であるが、そのうち1名は健康上の問題であまりインタビューができず、娘へのインタビューに代替した。

今回調査対象となったのは1917年生まれの97歳(2013年10月調査時点、数え年)から1935年生まれの79歳(2013年8月調査時点、数え年)までの夜

学経験者で、主に 1930-40 代の夜学経験を証言してもらった。夜学数が急増した 1920 年代の夜学経験者は、2013 年時点でそのほとんどがすでに 100 歳を超えていることから生存者が極めて少なく、該当者を探すのが困難だったため、今回の調査では次善の策として主に 1930~40 年代夜学の経験者を対象とした。夜学経験者 66 名の出身地域は、当時の黄海道をはじめ、平安南道、平安北道、江原道、京畿道、忠清南道、忠清北道、全羅南道（当時、済州島を含む）、全羅北道、慶尚南道、慶尚北道など、咸鏡南道・咸鏡北道を除くすべての道にわたっている。夜学に通い始めた年齢（数え年）は当時 6 歳から 18 歳まで幅広く、修学期間は 1 週間から数ヶ月、1 年～4 年、長い場合は 6 年や 8 年間学

んだ人もいる。

ただし、証言内容が 70 年以上前のことでもあり、また現在の立場から当時を回顧するので、証言の信憑性や恣意性のようなオーラルヒストリーの研究手法そのものの限界を本研究も抱えている。

なお、本研究ではインタビュー対象者から許可を得て、実名及び生年等の個人情報を使うとともに、植民地期の創氏改名による日本名も明記している。また、インタビュー対象者の年齢については韓国で通用されている数え年を使う。インタビュー対象者についての基本情報及び夜学関連情報、そして調査日と場所等は、＜表 1＞と＜表 2＞の通りである。

＜表 1＞インタビュー対象者（生徒）の基本情報及び夜学関連情報

	氏名	日本名 (創氏改名)	性別	生年	出身地 (当時の地名)	修学期間 (時期)	夜学名・類型	設立者・教師	調査日及び 場所
1	尹金同	伊原金同	男	1927	全羅南道宝城郡 蘆洞面広谷里	2 年 (1940-41 年)	養正院 (1940 年設立)	設立者：尹允基 (元訓導) 教師：尹允基ほか	2013.10.10 (光州市)
2	任泰善	石川泰善	男	1931	全羅南道宝城郡 会泉面鳳崗里	3 年 (1940-42 年)	同上	同上	2013.10.10 (全羅南道 長興郡)
3	金純任	金光純任	女	1929	全羅南道宝城郡 蘆洞面広谷里	3 年(1940-42 年)	養正院&夜学	同上	同上
4	呉ヨンスク	不明	女	1932	全羅南道宝城郡 会泉面全日里	約 4 年 (1940-43 年)	同上	同上	2013.10.10 (光州市)
5	呉ジョンスク	豊山よし子	女	1929	全羅南道済州郡 翰林邑明月里	2 年 (1942-43 年)	明月塾 (1942 年設立)	設立者：呉鏞範 (村の青年) 教師：呉鏞範	2013.6.20 (済州市)
6	呉ゲア	豊山明子	女	1931	同上	1 年半程度 (1942-43 年)	同上	同上	同上
7	呉相春	豊山花子	女	1931	同上	2 年程 (1942-43 年、間 欠的)	同上	同上	同上
8	呉鏞守	豊山英樹	男	1934	同上	2 年 (1942-43 年)	同上	同上	2013.8.14 (ソウル市)
9	梁栄一	吉川栄一	男	1933	同上	同上	同上	同上	同上
10	文淳昱	文村淳昱	男	1935	同上	同上	同上	同上	同上
11	朱イムロ	不明	男	1921	忠清南道洪城郡 洪城郡洪東面雲 月里	数ヶ月 (1944-45 年)	八卦里講習所	設立&教師：崔 ビョンハン (村 の青年)	2013.5.1(忠 清南道洪城 郡)
12	金玉培	不明	女	1930	忠清南道礼山郡 礼山邑	数ヶ月 (1944-45 年)	講習所	設立者：不明 教師：若い男女数 人	2017.6.6 (忠清南道 瑞山市)
13	李載玄	宮本載玄	男	1930	京畿道振威郡梧 城面梁橋里	1 年 (1936 年)	講習所	設立者：黄ウクジ エ (東京留学経験 の村の青年) 教師：3-4 人	2016.2.21 (京畿道平 澤市)
14	姜鉉九	不明	男	1931	京畿道平澤郡浦 升面	1 年 (期間は不 明)	講習所	設立：朴スンホ 教師：李ノマン	2016.2.20 (京畿道平 澤市)
15	李泰洙	青木泰洙	男	1930	京畿道振威郡玄 徳面新旺 1 里	1 年(1936 年)	新旺里講習所	設立：不明 教師：アサンボン	2016.2.21 (京畿道平 澤市)
16	徐讃錫	大峰讃錫	男	1930	京畿道平澤郡玄 徳面新旺 2 里	4 年(1939-42 年)	大安里講習所	設立：チョン・ジ ェソン (富裕層) 教師：村の青年た ち (訓練所で教育 を受けてきた人々)	同上
17	孔在環	昌原在環	男	1928	京畿道平澤郡玄 徳面徳睦里	4 年 (1941-44 年：黄山里講習 所 1 年、徳睦里 講習所 3 年)	黄山里講習所 から徳睦里講 習所 (1942 年 設立、2 年生 に入学) へ移 る	黄山里講習所 (教 師：朴ボンファ ン)、徳睦里講習 所 (設立：村の 人々、教師：村 の青年 2 人 (1 人 はキ・ドンチョル、 もう 1 人は孔氏)	同上

18	孔殷澤	昌原殷澤	男	1931	同上	6年(1940-45年：大安里講習所2年、徳睦里講習所4年)	大安里講習所から徳睦講習所へ移る。夜は夜学でハングルも習う	徳睦里講習所(設立：村の人々、教師：村の青年2人(その一人はキ・ドンチョル、もう一人は孔氏))	同上
19	李敏金	咸豊敏金	女	1934	京畿道平澤郡梧城面金谷里	1学期(1944年)	金谷里講習所	設立&教師：村の青年(金氏)	同上
20	李愚享	完山愚享	男	1925	京畿道驪州郡山北面上品里	3年程度(1933-35年頃)	講習所	設立：不明 教師：村の青年2人(李ジェホほか1人)	2017.4.8 (京畿道驪州市)
21	権赫洙	不明	男	1933	京畿道安城郡一竹面和谷里	1年(1940年)	夜学(ハングルのみ)	設立者&教師：チョン・ユヒョン、アン・ゾンデ、シン・ドクソン(村の青年)	2016.1.29 (京畿道安城市)
22	崔聖夏	松田正美	男	1923	忠清南道論山郡連山面白石里	1年程度(1931年頃)	白石労働夜学会(1927年設立、公会堂)	設立者：崔卿夏 教師：崔卿夏ほか3人程度	2013.8.15 (忠清南道論山市)
23	李容洙	安原容洙	女	1928	慶尚北道星州郡(出生)、同道大邱府(幼年期)	1年程度(1938年、間欠的)	講習所	設立者：不明 教師：日本人1人、朝鮮人数人	2015.3.13 (大邱市)
24	李泰吉	創氏改名せず	男	1920	慶尚南道咸安郡咸安面大山里	3年(1930-32年)	夜学(祭室)	設立&教師：村の青年3-4人	2013.8.9 (釜山市)
25	崔グモク	不明	女	1929	黄海道延白郡	2年(1940-41年、冬の2ヶ月のみ)	夜学	設立者&教師：村の青年	2013.8.10 (仁川市)
26	黄玉順	不明	女	1930	全羅南道靈岩郡	数ヶ月(1937年、間欠的)	夜学	設立&教師：村の青年	2013.10.11 (ソウル市)
27	コ・イスン	不明	女	1930	慶尚南道山淸郡生比良面	期間は不明。普通学校と並行	夜学(ハングルのみ)	設立者&教師：シン・ジェヨン(村の青年)	2013.10.12 (ソウル市)
28	曹乙出	昌山乙出	男	1924	慶尚南道陝川郡伽耶面	8年(1932-39年)	夜学	設立者：不明 教師：3人(科目別)	2013.12.14 (ソウル市)
29	金ブンレ	不明	女	1927	全羅北道益山郡裡里邑銅山里	1年程度毎晩(1938-39年)	夜学	設立者&教師：村の青年	2014.3.29 (京畿道驪州市)
30	チョン・ウルスン	不明	女	1927	忠清北道忠州郡仰城面中田里	数ヶ月(1935年)	夜学	設立者&教師：村の青年	同上
31	韓智順	不明	女	1928	全羅北道任実郡焚樹面	農閑期(1935年)	夜学	設立者：不明 教師：村の青年	2016.11.24 (全羅北道任実郡)
32	崔順丹	不明	女	1930	慶尚北道亀尾市善山郡高牙面	6年(1937-42年)	夜学	設立者：村の青年(日本留学経験者) 教師：村の青年数人	2017.4.6 (江原道東草市)
33	崔世泰	松村世泰	男	1927	全羅北道長水郡山西面白雲里	1年程度(1938年)	夜学(会館)	設立者：村の人々 教師：村の青年1人	2016.11.24 (全羅北道任実郡)
34	安光治	安田光治	男	1930	平安北道義州郡古城面龍山洞	1年程度(1935年頃)	夜学(公会堂、ハングルのみ)	設立&教師：村の青年	2016.2.2(京畿道平澤市)
35	李ゲシク	不明	男	1928	江原道春川市南面鉢山里	2年間冬のみ(1942-43年頃)	夜学(公会堂)	設立者&教師：村の青年1人	2017.9.7 (京畿道楊平郡)
36	宋貞燮	宮本ジンネ	女	1931	忠清南道洪城郡洪東面洪元里	3年(1942-44年)	夜学&国語講習会(学校)	(夜学)設立&教師：李オクス(村の青年) (講習会)設立&教師：洪東国民学校	2013.5.2(京畿道平澤市)
37	宋鎬燮	宮本鎬燮	男	1934	同上	1年(1942年)	夜学	設立&教師：李オクス(村の青年)	2017.9.9(京畿道九里市)
38	李玉順	宮本玉順	女	1925	全羅南道済州郡旧左邑松堂里	1年(1940年)	夜学	設立&教師：小学校在学中の少年	2013.6.20 (済州市)
39	李基月	不明	女	1921	忠清北道報恩郡	3-4年程度(1933-36年)	夜学	設立&教師：普通学校在学中の親戚	2013.4.30 (ソウル市)
40	朴光業	不明	男	1931	京畿道驪州郡巢由里	3年(1938-40年)	夜学・講習所	(夜学)設立&教師：チョン・ウムジョン(利川女学校の生徒) (講習所)設立&教師：ユン・テボク(隣村の青年)	2013.10.11 (ソウル市)
41	李溪淑	不明	女	1927	京畿道驪州郡大神面加山里	2年程度(1938-39年頃)	夜学(書堂、ハングルのみ)	設立&教師：友人の祖父(書堂の先生)	2017.4.8 (驪州市)

42	金ホン ブン	不明	女	1931	忠清南道瑞山郡 浮石面看月島里	1年程度（1944・ 45年）	夜学（書堂、 漢文のみ）	設立&教師：父親 （書堂の先生）	2017.6.6 （忠清南道 瑞山市）
43	姜甲秀	江本甲秀	男	1926	江原道春川郡新 南面	1年（1931年）	夜学	設立者：金裕貞 （小説家） 教師：金裕貞ほか 数人	2013.8.8 （江原道春 川市）
44	金小英	創氏改名 せず	女	1932	慶尚南道慶州 （出生）、同道泗 川市昆明面（幼 年期）	1年半程度 （1938-39年）	光明学園（多 率寺、1937年 設立）	設立者：僧侶・崔 凡述 教師：金東里（小 説家）ほか数人	2013.8.9 （釜山市）
45	李徳善	松本徳善	男	1924	京畿道華城郡半 月面	3年程度（1932・ 34年）	泉谷講習所 （監理教会、 1931年10月 設立）	設立者：崔容信 教師：崔容信ほか	2013.8.13 （京畿道南 楊州市）
46	金榮星	創氏改名 せず	男	1925	慶尚北道奉化郡 尺谷面	2年（1930-31年）	明洞書塾 （尺谷教会、 1909年設立）	設立者：金鍾淑 教師：チャン・ボ グ長老、金雲鶴ほ か数人	2017.9.8 （慶尚北道 奉化郡）
47	金鐘植	金村鐘植	男	1925	京畿道広州郡九 川面	1年半（1932-33 年）	夜学（教会）	設立者：教会 教師：昼間は李先 生がハングルと 算数を、夜間には 僧侶が来て漢文 を教えた。	2013.12.14 （ソウル市）
48	金玉実	金沢玉実	女	1925	平安南道平壤	3年（1931-33年）	夜学（教会）	設立者：教会 教師：崇実中学校 の生徒たち	2013.10.11 （ソウル市）
49	桂起成	桂本起成	男	1931	京畿道江華郡良 道面仁山里	1年（1944年）	興天私設講習 所（興天教 会、1943年設 立）	設立者：興天教会 （所長：チョン・ ソンナム） 教師：ハン・ジュ ンソプ、ユ・ジョ ンザ	2015.1.31 （仁川市江 華郡）
50	全東穆	星山東穆	男	1931	同上	2年（1943-44年）	同上	同上	同上
51	金ダナム	金城ダナ ム	女	1932	全羅南道順天郡 別良面	1・2年程度 （1940-41年、間 欠的）	講習所	設立者：不明 教師：学校教員と 班長（青年）が交 代で教える	2014.12.27 （ソウル市）
52	金グソン	不明	女	1930	慶尚北道星州郡 修倫面溪亭里	農閑期に2・3ヶ 月程度（1942 年）	講習所（学 校）	設立：不明 教師：村の青年	2015.3.13 （慶尚北道 高靈郡）
53	張玉山	不明	女	1927	京畿道振威郡玄 徳面徳睦里	数ヶ月（1935 年）	講習所（学 校）	設立：不明 教師：2・3人（日 本人から朝鮮人 へ変わる）	2016.2.21 （京畿道平 澤市）
54	チョン・ ゲフン	不明	女	1925	慶尚北道聞慶郡 聞慶邑馬院里	3年（1940-1942 年、農閑期）	婦女夜学会 （学校）	設立：国民学校 教師：複数人	2016.1.29 （京畿道利 川市）
55	李福雨	不明	女	1925	忠清北道鎮川郡 萬升面竹岷里	講習所：2年 （1938-1940年） 夜学：1年半程 度（1939-40 年）	講習所（学 校） 夜学（公会 堂）	（講習所）設立： 国民学校、教師： 李ホソン（女性） （夜学）設立&教 師：不明	2016.2.20 （京畿道利 川市）
56	朴チャ ンレ	アライセ イシャク	女	1928	忠清南道洪城郡 結成面衡山里	1年（1942年）	夜学	設立者：不明 教師：青年2人	2013.5.3（ソ ウル市）
57	趙廷相	平田廷相	男	1934	忠清南道瑞山郡 八峰面徳松里	1年（1943年）	徳松里講習所	設立：面 教師：村の青年 （安原という朝鮮 人）	2016.4.30 （ソウル市）
58	鄭瑞鉉	東村瑞鉉	男	1933	京畿道安城郡新 興里	1年半（1944・ 1945年）	国語講習会	設立者：チョン・ ユヒョン、アン・ ゾンデ 教師：シン・ドク ソン、アン・ワン ス（村の青年）	2016.2.20 （京畿道安 城市）
59	崔成洛	岩本成洛	男	1934	同上	同上	同上	同上	同上
60	李鳳来	国本鳳来	男	1934	同上	同上	同上	同上	同上
61	金スン ホン	金山純子	女	1927	全羅南道済州郡 旧左邑松堂里	合宿1週間 （1942年10月）	作業場	設立者：飛行機燃 料製造場 教師：村の青年2 人	2013.6.20 （済州市）
62	劉載燮	文川重男	男	1917	全羅北道扶安郡 白山面梧谷里	日曜講習会：数 ヶ月（1932年、 扶安郡） 外国語夜学：期 間是不明（1934 年頃、京城府）	日曜講習会（学 校） 外国語夜学（営 利目的）	（日曜講習会）設 立&教師：白山普 通学校 （外国語夜学）設 立者：不明、教師： 講師2・3人	2013.10.12 （ソウル 市）

＜表 2＞インタビュー対象者（教師）の基本情報及び夜学関連情報

	氏名	日本名	性別	生年	出身地	教授期間（時期）	夜学名・類型	設立者	調査日・場所
1	姜泰分	不明	女	1922	京畿道平澤郡浦升面	3 年（1939-41 年）	新明講習所	彭城教会	2016.2.21 （京畿道平澤市）
2	朴珪琬	蔚山珪琬	男	1924	京畿道江華郡華道面内里	2 年（1940-41 年）	尼山学術講習所	尹ジェグン	2015.1.31 （仁川市江華郡）
3	趙龍沂	香川龍沂	男	1926	全羅北道谷成郡玉果面	2 年（1942-43 年）	夜学	趙龍沂	2017.4.7 （光州市）
4	李完薫	山本完薫	男	1926	京畿道楊平郡丹月面	2 年（1939-40 年）	婦人夜学	李完薫	2017.9.7 （京畿道楊平郡）

②インタビュー内容及び方法

インタビューでは、主に氏名（創氏改名の有無）、年齢（生年）、性別、出身地、家族関係、家計状況（親の職業）のようなインタビュー対象者の基本情報をはじめ、夜学に通うようになった動機（目的）及び修学時期（年齢、期間）と場所、夜学の設立者及び教師、夜学で学び、経験した内容、教授方法（使用言語）及び教科書や教材、夜学に対する満足度、日本人との交流関係や印象、当時の生活状況や雰囲気などについて自由に話してもらった。教師経験者に対しては、教えるようになったきっかけをはじめ、教授期間や教授内容等についての質問を追加した。インタビュー時には、事前にインタビュー対象者の許可を得たうえで、ビデオカメラ及び IC レコーダーで撮影と録音をしながら実施した。インタビューの時間は、一人当たり短い場合は 30 分程度、長い場合は 2 時間程度かかった人もいるが、大半が約 1 時間程度であった。

本研究では、上記のインタビュー内容から、とりわけ夜学の教師に関する部分に注目して当時どのような人が夜学教師として携わり、どのような教育活動を行っていたかを検討する。今回のインタビュー対象者の中には、自叙伝やエッセイなどを出版した人（呉ゲア、李泰吉、趙龍沂）がおり、その著作には植民地期に通った夜学や当時の生活状況等についても詳細に記述されているので、それらの文献も参考にする。また「養正院」の設立者兼教師であった尹允基と「泉谷講習所」の設立者兼教師であった崔容信に関しては、彼・彼女に関する研究書や論文も発表されており、さらにその他のインタビュー対象者（姜泰分、朴珪琬）や夜学（興天私設講習所、尼山学術講習所、光明学園、白石労働夜学会等）を紹介する新聞記事やブログ、ホームページ等もあるので、それらも参照する。

2) インタビューから見てきた夜学教師の活動とその特徴

今回のインタビュー調査から得た証言をもとにして、

当時の夜学教師の活動とその特徴を考察すると、大きく 4 つの類型に分けることができる。まず、地域住民有志が学校に通えない不就学児童や学齢期を過ぎた住民のために設立した民衆夜学と、第二に、農村啓蒙運動の一環としてエリート知識人たちが運営した啓蒙夜学、第三に、学校や面等の官によって行われた官製夜学、最後に、求職者向けに営利目的で夜学を運営していた民間営利夜学などに分類することができる。

①民衆の教育欲求及び実力養成のための民衆夜学の教師

今回の調査対象者の 3 分の 2 以上は、地域住民有志が不就学者の基礎（識字）教育のために設立・運営した民衆夜学に通っていた。朝鮮総督府は学校増設において終始消極的であったため、1930-40 年代も中山間地域には学校が少なく、就学できない子どもが多かった。それゆえ、普通学校（1941 年から国民学校）への入学にも面接試験が課されるなど入学競争は激しく、夜学は不就学者の基礎教育だけではなく、入学試験を準備する予備校としての機能も果たしていた（呉鏞守、梁栄一、文淳昱、金玉培、宋鎬燮、安光治、桂起成、全東穆、尹金同）。

民衆夜学は、有志個人が自宅の舎廊房（主人が使う居間であり、客間としても使用される部屋）や地域住民の家、公会堂や会館、祭室等の地域の共有施設、もしくは新たに施設をつくって夜学を運営するところもあるなど、その運営形態や規模は多様である。比較的規模の大きい場合は、「講習所」という名称を使い、普通学校のように昼間に学年制で行うところが多かった。

民衆夜学で教える教師の大半は初等教育以上の教育を受けた地域の青年であり、その他には小・中学校に通いながら夜学教師をする場合（李基月、李玉順、朴光業）もあれば、書堂（寺子屋のような私塾）の先生が夜学を運営する場合（李溪淑、金ホンブン）もあった。地域の青年の場合は、概ね農業等の仕事の傍ら、夜学

教師を担う場合が多く、報酬もない場合が大多数であった。

教科においては、昼間に行われた講習所の場合は主に日本語、朝鮮語、算数、歌、絵画、制式訓練などが教えられ、運動会や遠足、演劇、学芸会等の行事も行われていたが、夜間に自宅等で小規模に行われる場合は、日本語、朝鮮語、算数等の識字教育が主に行われていた。教科書はない場合が多く、黒板に板書したものをしながら勉強することが大半であった。

皇国臣民化教育が始まった1938年以降、学校ではもちろんのこと、講習所等でも朝鮮語の教授は禁止されており、講習所内で朝鮮語を話すと罰金や体罰などを受けるところもあった（明月塾の生徒たち、徐讃錫、孔在環、孔殷澤、李敏金）。しかし、私設講習所として認可を受けるために、対外的には皇国臣民化を掲げ、日本語中心の教育を行いながらも、官からの監視を避け、密かに朝鮮語を教えたり、民族教育を行ったりする教師もいた。例えば、元訓導の尹允基は「文盲退治・貧困打破・浮浪児収容・皇国臣民化」を掲げ、養正院を私設講習所として認可を受けるが、実際授業ではハングルと歴史教育を密に行っていた⁴⁶。日本語のふりがなを黒板にハングルで書いて教えており、官からの監視役が見えたら鐘を鳴らして知らせ、急いで黒板を消したりしたという（金純任、呉ジョンスク）。明月塾の呉鏞範も1度だけではあるが、ある日の授業でなぜ教科書にある歴史を教えないかという質問を受け、「それは日本の歴史だからだ」「今も独立軍がどこかで戦っているから、解放されたら、その時には我が国（朝鮮—引用者）のために忠誠なさい」と本音を漏らしたことがあったという（呉ゲア）。

今回の調査では、主に不就学者のために地域住民有志が立ち上げ、生徒を募集する夜学が多数であったが、中には住民からのニーズに合わせて夜学を開くようになった人もいた。例えば、京畿道楊平郡丹月面の李完薫は、丹月尋常小学校を卒業してから1939-40年の2年間農閑期の冬期に婦人たちを対象にハングルを教える婦人夜学を開いたが、小説を読みたい婦人たちから文字を教えてほしいという依頼を受けて受講者の婦人の家において毎晩ハングルを教えるようになったという。

②農村啓蒙活動の一環としての啓蒙夜学の教師

上述したように、1920-30年代に展開されたハングル普及と農村啓蒙運動の一環としてエリート知識人たちによる啓蒙夜学が増えていく。新聞社主導のいわゆ

る「ブナロード運動」によって多くの高等普通学校の生徒らが地元や地方に入って夜学を組織したり、教会等の宗教団体を中心とした民衆啓蒙のための夜学が展開されたりしたのである。

今回の調査でも上記のような啓蒙夜学で学んだ人（姜甲秀、金小英、李徳善、金栄星、金鐘植、金玉実）や教えた人（姜泰分、趙龍沂）にインタビューすることができた。まず、姜甲秀が通った夜学は、小説家になる前の金裕貞が故郷の江原道春川郡で1930-32年に農友会と婦人会等を組織し、東亜日報社の農村啓蒙教育教材をもって教えていた夜学である。金小英は、叔父でもあり、当時小説家でもあった金東里が一時教えていた光明学園（多率寺）に小学校に入る前まで通った。李徳善は、小説『常緑樹』（沈薫、1935年）のモデルにもなった崔容信が農村啓蒙運動のために設立した泉谷講習所（監理教会）で学んでおり、金栄星、金鐘植、金玉実もそれぞれ教会の運営する夜学に通っていた。

一方、当時夜学教師として活動していた姜泰分は、京畿道平澤郡にある彭城教会が運営する新明講習所において農村指導教師養成課程を修了してから、同講習所で教師をしつつ、平澤郡梧城面の各世帯を回りながら農村の子どもや婦人たちを対象に識字教育と啓蒙運動を行っていた⁴⁷。また、普通学校卒業後、順天農林学校に通っていた趙龍沂は、1930年代の農村啓蒙運動と抗日意識の強かった玉果教会の影響を受け、週末や長期休み期間中は故郷に戻り、毎晩地域住民にハングルをはじめ、歴史や太極旗の描き方も教えていたと述べる⁴⁸。

③官製夜学の教師

1930年代にはエリート知識人たちによる農村啓蒙運動が行われたと同時に、一方では官によって農村振興運動が展開されていた。農村振興運動のために各地方に組織された農村振興会によって大々的に夜学が開設され、農閑期を利用して無産の男女児童に対する教育が行われた。1934年1月24日付の『東亜日報』によれば、全羅北道沃溝郡の各普通学校に貧困児童や学齢超過者のために年間50週の日曜日に私設学術講習会（日曜講習会）を開催していたが⁴⁹、授業は各普校の教員が担当していたので、実質的には官製夜学といわざるを得ない。実際今回の調査対象者の中には日曜講習会に通った経験を持つ人がいた。劉載燮は、1932年、全羅北道扶安郡白山面の白山普通学校で行われた日曜講習会に数ヶ月通ったことがあり、この日曜講習会での教授は普通学校の教員が担当したという。

日中戦争勃発後は皇国臣民化政策に伴い、国民学校で「国語講習会」が開催されていたが、今回の調査でも忠清南道洪城郡洪東面にある洪東国民学校が夏休み期間を利用して国語講習会を運営していたことが確認できた。同講習会に通った宋貞燮は、農閑期の冬期には地域の青年が開いた民衆夜学にも通うなど、官民両方の夜学で学んだのである。忠清北道鎮川郡萬升面竹峴里の李福雨も国民学校の運営する講習所と村の公会堂で行われた夜学の両方に同時に通っていた。その他、設立者は不明だが、学校の教師が教えていた講習所（金ダナム）や開催場所が学校だった講習所に通った人（金グソン、張玉山）もいた。

官製夜学の場合、学校や官公署のような公的機関が設立したものではなく、地方官吏や資産家が設立した場合は、それをすべて「官製夜学」と見做すことには慎重になるべきである。上述したように、夜学運動を主導した地方官吏や資産家の多くが自強運動論者・実力養成論者であり、夜学の設立趣旨と実践の間に隔たりが生じることもあった。例えば、今回の調査対象者である京畿道安城郡新興里の鄭瑞鉉と崔成洛、李鳳来の3人が通った国語講習会の設立者であり、後援会長であったアン・ゾンデは、毎日授業の様子を見に来たり、教師が欠勤する場合、代理で授業を行ったりしていた。ある日アン・ゾンデは、生徒たちが畑仕事をするところに現れ、「君、朝鮮の国旗を知っているか」と言いながら、畑に太極旗を描いて見せてくれたが、それが今も最も印象に残っていると、当時の生徒だった鄭瑞鉉は証言する。

④民間営利夜学の教師

従来の夜学研究では見られなかった夜学として、営利目的で求職・転職者向けに有料で提供される夜学があったという証言が今回の調査で得られた。全羅北道扶安郡白山面梧谷里で生まれ育った劉載燮は1932年に上京し、職を探していた。しかし、日本語や算数が上手でないと、給料などの条件の良い職に就きにくい。ため、日本語を習える「外国語夜学」に通ったという。同夜学は当時京城府鍾路2街の和信百貨店（今の国税庁があるところ）の裏側にあり、電車から「外国語夜学」という看板が見えたので、訪ねたという。劉載燮は仕事が終わってから毎晩9時頃から（土日は少し早めに）2時間ずつ習い、授業料として毎月50銭支払っていた。当時劉載燮の働いていたところの月給が1円50銭だったので、給料の3分の1を夜学に使ったことになるので、授業料は結構高いものだったと推測できる。

同夜学では、主に日本語と算数を教えており、就職の面接試験に役立つような日本の歴史や生活文化等も少し触れていた。同夜学には2-3人の教師（30-40代の男性（朝鮮人））が一つの部屋を間仕切りして教えており、受講生が多いクラスは20-25人であり、少ないクラスは7-8人であった。受講生は全員就職・転職を準備する男性であった。実際、劉載燮は夜学に通ってから2回転職をするが、その度給料が3倍くらい高い所へ転職していた。

上記の「外国語夜学」以外に類似のところはみたことがないという劉載燮の話からすれば、その数は少ないものの、京城には就職を求めて上京した人々を対象にして、今日の語学塾のような営利目的の夜学が存在していたとみられる。

おわりに

第2節でも言及した金炯睦の指摘のように、夜学の区分はそれほど簡単ではない。金は、1920年代半ば以降民族解放運動や革命的労働組合運動及び農民組合運動の進展とともに夜学運動も発展するが、まもなく官当局からの弾圧によって解体されるか日本語普及のための夜学に変質していったこと、そして夜学設立者が前・現職官吏や資産家の場合はすべて「官製夜学」と見なすことが多いが、実際自強運動論者や実力養成論者のうち夜学運動を主導した人物はその大半が前・現職官吏や資産家だったことを鑑みれば、植民地期の夜学を単に設立主体によってその性質を断定してしまうことは問題であると指摘する⁵⁰。

ところが、当時の夜学の性質を明らかにするにはその関連史料が極めて少なく、それゆえ当時の夜学経験者からの証言は非常に貴重である。とくに、当時の夜学で教えていた教師の証言やその教えを受けていた元生徒たちの証言は、設立主体や設立趣旨と実際の教育運営との間に生じ得るズレや隔たりを明らかにし、当時の夜学の実態により近づくことに大いに役立つ。このような課題意識から本研究は出発している。

実際、今回の調査においても、公式に掲げる設立趣旨に反する民族教育を官の監視を避けながら密に行っていた事例が見られた。近くに学校がない地域の子どもたちに教育を提供するためにはますます厳格となる私設講習所の認可条件を満たさざるを得ない切迫した状況と、一方では戦争のための食糧や金属、労働力等の「供出」の強化によって民衆の生活が窮乏化していく悪条件との間で、植民地期を生きる者としての教師の複雑な思いが夜学の事例からうかがえる。

本研究でインタビューした調査対象者は、夜学で学んだ経験を有する生徒が大半であるが、彼・彼女らの多くは当時夜学の性格や趣旨に対するこだわりはなく、教師に対しても官・私設を問わず尊敬し、感謝する人が多かった。ただし、研究対象者の大半が調査当時80歳以上の高齢者であり、なおかつ70年以上前の出来事に対する振り返りであるため、その恣意性や正確性に関する課題は残る。しかし、夜学教師を含む夜学経験者66名からオーラルヒストリーを聞き出すことによって、これまで先行研究では明らかにできなかった夜学教師の具体的な実践とともに、その実践から夜学の新たな側面を析出することができた点は、本研究の有意義な成果といえる。

＊本研究は、公益財団法人ヒロセ国際奨学財団の研究助成によって行われたものである。

<注> (◎は韓国語文献)

- 1 代表的な研究として、韓祐熙著・佐野通夫訳「日帝植民統治下の朝鮮人の教育熱に関する研究」四国学院大学『論集』第81号、1992、pp.113-132；吉川宣子「植民地期朝鮮における初等教育一就学状況の分析を中心に一」『日本史研究』370、1993、pp.31-56；◎呉成哲『植民地初等教育の形成』教育科学社、2000などがある。
- 2 「朝鮮人の国語解得者 十五万六千余名 百人中二十八人」『毎日申報』1937.3.7。
- 3 ◎金炯睦「夜学運動の意義と研究動向」韓国史学会『史学研究』第66号、2002、p.181。
- 4 代表的な研究としては、姜東鎮「日帝支配下の労働夜学」『韓』34号、1974、pp.25-62；◎盧榮澤『日帝下民衆教育運動史』探求堂、1980；石川武敏「1920年代朝鮮における民族教育の一断面一夜学運動について一」『北大史学』21、1981、pp.35-52；◎車錫基「日帝下労働夜学を通じた民族主義教育の展開」『高麗大教育論叢』16・17、1987、pp.1-17などがある。
- 5 ◎金炯睦「1920年代前半期京畿道夜学運動の実態と機能」独立記念館韓国独立運動史研究所『韓国独立運動史研究史』第13集、1999、pp.101-135；李正連『韓国社会教育の起源と展開—大韓帝国末期から植民地時代までを中心に—』大学教育出版、2008等が代表的な研究である。
- 6 代表的な研究として、◎チョ・ジョンボン、金敏男「日

帝下永川地域の労働夜学に関する研究」『韓国教育』第31巻第4号、2004、pp.53-71；◎金敏男、チョ・ジョンボン「1930年代漆谷地域における夜学の再発見」『中等教育研究』第42号、1998、pp.1-32；李正連「植民地期朝鮮における不就学児童と夜学—1930~40年代夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—」『日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究』平成23~25年度科学研究費補助金（基盤研究(B)、研究代表者：佐藤由美）研究成果報告書、2014、pp.67-86；李正連「植民地期朝鮮における私設学術講習所と不就学者の学び—『養正院』及び『明月塾』出身者のオーラルヒストリーをもとに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第54巻、2015、pp.151-159；李正連「植民地期朝鮮における夜学と女性の学び—夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—」アジア教育学会『アジア教育』第10号、2016、pp.15-30などがあげられる。

- 7 ◎チョ・ジョンボン、金敏男「日帝下永川地域における労働夜学に関する研究」『韓国教育』第31巻第4号、2004、pp.53-71；金敏男、チョ・ジョンボン「1930年代漆谷地域における夜学の再発見」『中等教育研究』第42号、1998、pp.1-32。
- 8 ◎盧榮澤『日帝下民衆教育史』2010、学而時習、pp.136-137。
- 9 ◎「新興講習所設置」『毎日申報』1928.3.7。
- 10 ◎金炯睦、前掲書、2002、p.169。
- 11 同上、pp.171-172。
- 12 ◎チョ・ジョンボン、金敏男、前掲書、p.55。
- 13 ◎「文盲退治目標に卅二夜学会設置 星州郡当局で」『朝鮮中央日報』1935.11.28。
- 14 西村緑也『朝鮮教育大観』朝鮮教育大観社、1931、pp.1-4。
- 15 朝鮮総督府学務局、『学校を中心とする社会教育状況』、1922、pp.147-148。
- 16 同上、pp.227-228。
- 17 同上、p.240。
- 18 ◎「抱川郡間村 進明夜学会 農村振興会経営」『毎日申報』1934.1.10。
- 19 ◎「江華郡管内の夜学成績は良好 文盲四千四百余名を退治 振興会の功績」『毎日申報』1934.1.31。
- 20 三ツ井崇『朝鮮植民地支配と言語』明石書店、2010、p.52。
- 21 ◎「国民学校を開放、町毎に国語講習会 - 百万府民に国語解得運動」『毎日申報』1941.6.21。
- 22 ◎「国語全解に拍車（各地）」『毎日新報』

- 1942.8.17。
- 23 石川武敏、前掲書、p.41。
- 24 李正連、前掲書、2008、p.199。
- 25 ◎方定煥「民衆組織の急務」『農民』1930年7月号の「夏休に帰郷する学生たちに」、p.5。
- 26 ◎李相協「まず啓蒙運動を」同上。
- 27 ◎「普校生二名、農民夜学創設一学びながら教える、修業者が卅余名」『東亜日報』1930.10.27。
- 28 ◎「洞里児童に誠意をもってハングルを教授、白川漢橋夜学も少年」『朝鮮中央日報』1936.3.8。
- 29 ◎「新興市の新消息」『東亜日報』1922.5.3。
- 30 ◎「篤志の夜学会」『毎日申報』1915.8.7。
- 31 ◎「逐日発展する振威振興会成績一夜学だけでも六十余箇所」『毎日申報』1933.8.10；「徳川蚕島面に農村振興会、農民夜学に助力」『中央日報』1932.1.20；「広州郡振興会 文盲退治に専力、各面各村に夜学を開設、学生数五千三百余名」1935.1.29。
- 32 ◎金炯睦、前掲書、2002、p.172。
- 33 ◎「区長の篤行一貧民を救済、夜学を創設」『東亜日報』1931.2.26。
- 34 ◎「文盲児童退治のために夜学を設置」『東亜日報』1936.2.18。
- 35 朝鮮農民社は1925年に組織された天道教農民運動団体として京城に本部を置き、地方に各支部と社友会を組織した。朝鮮農民社は設立初期から機関誌『朝鮮農民』『農民』を発行し、各種の講演会を開催して農民の知識啓発と教養運動を展開した。そして農民夜学を通じた農村運動も行い、『農民読本』『ハングル読本』等の夜学教材も発行した。
- 36 ◎「棲鶴里農民社 夜学堂を新築、区長も理事が兼任して」『東亜日報』1931.10.9。
- 37 例えば、◎「大邱公普夜学」『東亜日報』1922.5.2；「公普校訓導 夜学も担当、無産児童のために」『毎日申報』1927.10.21；「陽地 無産夜学 普校教員が熱心」『東亜日報』1931.1.27；「順天普校教員一同夜学に専力」『東亜日報』1932.12.14；「公普教員らが夜学を開始」『東亜日報』1936.1.28；「洪川普校教員総動 蓮峰で夜学開始、文盲啓発に熱誠傾注」『毎日申報』1937.1.29などが挙げられる。
- 38 ◎慶尚南道馬山にある昌信学校内に開設された婦人夜学部で北京大学在学中に当分の間同校で教鞭を執っている李允幸と義信女学校教師の李桂卿が夜学部でも教え、教科書は婦人の必要に合わせて新たに編纂したといわれる。「婦人夜学設立」『東亜日報』1923.9.10。
- 39 ◎「無報酬で教授、昌信学校教員の鄭炳淳氏が夜学を設置」『東亜日報』1926.5.18。
- 40 李正連、前掲書、2008、pp.177-180。
- 41 ◎「安峽面区長会議開催」『毎日申報』1932.11.28。
- 42 ◎「私立講習所教師講習会」『毎日申報』1934.9.4；「忠州郡夜学教師講習会」『毎日申報』1934.10.7；「谷山郡書堂教師講習会開催、農村振興の基本になるよう」『毎日申報』1934.1.29；「補助教育機関大改革 書堂教師講習会、準簡易普校を経営するため、忠北道の文教対策」『毎日申報』1934.8.11；「瑞川郡管下 書堂教師講習」『毎日申報』1936.8.6；「五百余の改良書堂教師の素質向上、忠北で講習会開催」『毎日申報』1937.7.15；「私学教員再教育一冬閑期を利用、江原で講習会一」『毎日申報』1939.10.10など。
- 43 ◎「書堂と講習所の指導監督を強化、教師の素質向上計画も樹立、忠北で各郡に示達」『毎日申報』1938.7.22；「年復年激増する慶南の私設講習、八百十一万四千名収容、教師の資格が大きな問題」『東亜日報』1937.9.10。
- 44 ◎「京畿道農村啓蒙、夜学教師講習会の講師として崔秉協囑託を任命派遣、十七日から巡回開催」『毎日申報』1934.5.10；「文盲退治に努力する夜学教師講習会一長湍郡で開催」『毎日申報』1934.5.19；「夜学教師講習会一高陽郡で」『毎日申報』1934.7.28。
- 45 国語普及のために、国語講習所に限っては道知事の認可を得るための「複雑な手続きを必要とせず、ただ講習所開催の事項を府尹または郡守を経由して道知事に提出すると同時にその謄写を所管警察署長に提出する」ことにしている。◎「国語講習所に限って道知事の可不必要」『毎日申報』1942.7.12。
- 46 ◎ソン・ギョンシク『民族の真の教育者 学山尹允基』ハンギル社、2007、pp.134-150。
- 47 ◎「大韓聖公会・彭城聖ヨハン教会の生々しい証人、姜泰分おばあさん」『平澤市民新聞』2015.3.15 (<http://www.pttimes.com/news/articleView.html?idxno=33333>) (アクセス日：2018.1.31)。
- 48 ◎趙龍沂『卵が孵り、岩を越える』チェッカ、2012、pp.26-27、39-41。
- 49 ◎「貧窮児と超齢者のための日曜講習会開催、一年五十週日に利用教授、沃溝郡各普校に設置」『東亜日報』1934.1.24。
- 50 ◎金炯睦、前掲書、2002、pp.171-172。

A Study of Night School Teacher in Colonial Korea : Based on the Oral History by Peoples Who Studied or Taught at Night Schools during the 1930s and 1940s

LEE, Jeongyun (The University of Tokyo)

The aim of this study is to clarify the activities and characteristics of night school teachers at the time through an interview survey with teachers and students who have experienced night schooling in colonial Korea. As far as the night school teacher is concerned, only fragmentary historical records have been found, and the whole activity has not been disclosed.

In this paper, based on the oral history from the teachers and students who experienced the night school during the 1930s and 1940s, consider the educational activities and its meaning of the night school teacher in colonial Korea in a multi-faceted way.